

第2回北海道150年道民検討会議 議事録

日時：平成28年8月8日（金）15:00～16:40

場所：ホテルポールスター札幌 2F コンチェルト

【出席者】

<委員>

山口委員長、石森委員、伊藤委員、生方委員、落合委員、加藤委員、菊谷委員、小磯委員、西條委員、佐々木委員、鈴木委員、高橋賢友委員、高橋はるみ委員、高向委員、竹田委員、谷本常務理事【棚野委員代理】、飛田委員、三好委員 計18名

<事務局>

（北海道経済連合会）菅原理事・事務局長

（北海道商工会議所連合会）安宅総務担当部長

（北海道）山谷副知事、窪田総合政策部長、平野政策局長、岩崎北海道150年事業準備室長

● 窪田総合政策部長（事務局：北海道）

それでは、定刻となりましたので、第2回の北海道150年道民検討会議を開催させていただきたいと思っております。本日はお暑い中、またお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。始めに、事務局を代表しまして、高橋北海道知事からご挨拶を申し上げます。

● 高橋はるみ委員（北海道）

高橋でございます。お暑い中、こうやって委員の皆様方にお集まりをいただき誠にありがとうございます。北海道150年道民検討会議、6月に第1回の検討会議を開催させていただきました。そして、基本方針の「議論のたたき台」をお示しをいたしました。それからもう2か月近くが経過をいたしましたところであります。これまでの間、道民の皆様方からご意見を伺うため、インターネットでのアンケート調査を実施するとともに、「北海道みらい日誌」と題し、若い世代の北海道の未来に向けた思いを作文として募集したところであります。さらに、小磯委員を座長とする「北海道みらいワーキング」では、若手の経営者や大学の先生、作家など、各地域で活躍される多様なメンバーによる議論も行われたところであります。

また、先日、松阪市長が私のところに来られました。松阪市はご案内のとおり、松浦武四郎翁が生まれたところでございます。ちょうど私ども北海道150年の節目の年に、松浦翁が生誕200年を迎えるということのようでありまして、共に盛り上げたいという話であり、快く私の方からも、そのようにしたいというふうに申し上げたところでございます。多面的なこの北海道150年の盛り上げを是非皆様方と共にやって参りたいと思っております。

本日は、前回の会議でいただいたご意見はもとより、これまでに道民の皆様から寄せられた様々なご意見やアイデアなども踏まえ、基本方針の原案についてご議論いただきたいと思いますと考えております。また、本日の会議には、先ほど触れました「北海道みらい日誌」の最優秀賞の受賞者も出席されているところであり、ご本人からの発表を、非常に楽しみにしております。50年後の北海道を想像しながら

ら、若い世代の皆さんの思いを、しっかり受け止めてまいりたいと考えております。

本日も、よろしく願いいたします。ありがとうございます。

● 窪田総合政策部長（事務局：北海道）

本日の出席でございますが、北海道町村会の棚野委員の代理として、谷本常務理事にご出席をいただいております。あとの皆様は全員ご出席をいただいております。

以降の進行は、山口委員長にお願いを申し上げます。

● 山口委員長（北海道大学）

委員長を務めさせていただいております北海道大学総長の山口でございます。

本日は、北海道 150 年道民検討会議の第 2 回目でございますが、今回は、若い方の希望、夢をお聞きできるようですので、北海道のこれから先 50 年の行く末を見据えての議論を活発に行っていただきたいと思っております。円滑な進行へのご協力についてもあわせてお願いいたします。

それでは早速議事に入らせていただきます。一つめの議事は、「北海道みらい日誌」についてでございますが、この若い世代の方々から募集した作文につきましては、小磯委員が座長を務める「北海道みらいワーキング」で審査をお願いしたところでございます。まずは小磯委員から、審査を終えての感想などご発言いただきたいと思っております。

● 小磯委員（北海道大学公共政策大学院）

北海道みらいワーキングの方で、今回の「北海道みらい日誌」の審査に携わりました。ワーキングの座長という立場で、審査に当たってのご報告と感想を簡単にお話したいと思います。

詳しい経過につきましては、後ほど事務局からご説明があると思っておりますけれども、今回、高校生を中心に、390 という 400 近い作品が寄せられました。その中で、3 つのテーマ毎に、すなわち、「生活・安心」、「経済・産業」、「人・地域」、これはなかなか難しいテーマなのですが、この 3 つのテーマ毎にそれぞれ最優秀作品というものを決定いたしました。

全体の作品、本当に若い方々の感性が伝わってくる素晴らしい作品が多かったという印象がございます。審査に携わったみらいワーキングの各委員も大変ご苦労されたようで、後ろの方にいくつかの委員のコメントも載せられていますけれども、結果的にはこの「北海道みらい日誌」という名に相応しい作品が選ばれたのではないかなというふうに感じております。

応募された作品、それから審査にあたったワーキングメンバーの各委員の意見をお聞きした上での全体の感想ですけれども、やっぱり若い人達、将来への不安、特に人口減少とか、そういうものも感じながらも、一方で、夢や希望というものもしっかり我々の方に伝わってくる、そういったメッセージでした。その根底には、本当に北海道、自分達が住んでいる故郷、そこを思う気持ちというものがしっかり伝わってくる素晴らしい作品だというふうに思いますし、これから北海道 150 年事業の中身を検討していく上でも受け止めるべき内容が大変多かったと、私自身、大変感銘を受けたところでございます。

今回、最優秀賞に選ばれました、中川さん、坪井さん、山岸さん。是非この作品に込めた思いを忘れずに、これからの人生、挑戦して欲しいなという願いを込めて、簡単ですが、私からの報告にさせていただきます。

● 山口委員長（北海道大学）

ありがとうございました。それでは改めまして、事務局から説明をお願いします。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

事務局の岩崎と申します。よろしく願いいたします。

それではまず【資料 1-1】をご覧ください。「北海道みらい日誌」の応募総数につきましては、390 件でございました。

概要及び募集結果につきましては記載のとおりです。

一部の高等学校からは、授業で作文のプレゼンテーションなどを行いまして、北海道や地域の未来をみなさんと楽しく考える時間を持つことができたといった報告もいただいております。

審査につきましては北海道みらいワーキング委員の皆様により厳正に行われました。資料の裏面で、最優秀賞作品に対する委員のコメントを紹介しています。

なお、最優秀賞を受賞されました 3 つの作品につきましては、【資料 1-2】で紹介させていただいております。このあと表彰式を行ったのちに、ご本人から発表していただきます。

それでは、山口委員長、高橋知事、飛田会長におかれましては、表彰式の準備をお願いいたします。受賞された方及び代理の方は、前の方へお進みください。

それでは、名前を呼ばれた方から、順に前にお進み下さい。山口委員長から賞状の授与、高橋知事と J A 北海道中央会の飛田会長からは、副賞が贈呈されます。

(授賞式)

- | | | | |
|-----------|---------------|-----|------------------|
| ① 「生活・安心」 | 北海道札幌稲雲高等学校 | 1 年 | 中川翔真さん |
| ② 「経済・産業」 | 北海道富良野緑峰高等学校 | 2 年 | 坪井 古都未さん |
| ③ 「人・地域」 | 北海道札幌国際情報高等学校 | 2 年 | 山岸志穂さん（代理：志知副校長） |

それでは次に、最優秀賞を受賞した作品を、ご本人から発表していただきます。

まず、札幌稲雲高校の中川さん、前にお進みいただき、発表をお願いいたします。

● 中川翔真さん（札幌稲雲高校）

顔を上げて・・・。

稲雲高等学校 1 年 中川 翔真。

北の大地「北海道」に住む私が今、感じていること。それは北海道愛だ。

私は、大自然の中で味わう涼しい風が大好きだ。歩道に停まっている車の排気ガスよりも・・・。私は、山道をドライブしている時に見かける狐の愛らしさが大好きだ。動物園で見るコンクリートの上のレッサーパンダよりも・・・。田舎で立ち寄るフリーマーケットが好きだ。右手に持つスマホで検索するネットオークションよりも。

今、グローバル化が急進している。それは、大都会だけではない、ここ北海道でも同様だ。私の地元札幌の駅で周囲を見渡すと、顔を上げている人はほとんどいない。皆、一様に首を下に向けてスマホの画面に夢中だ。若者だけではない。子どもも大人も年配者も、目の前の半径 1 メートルしか見ていない。

顔を上げて見てみよう。北海道は広い。北海道の大きさは私達の誇りだ。だからこそ私は、大好きな

自然溢れる北の大地を、この広い北海道全体で守っていかなければならないと思っている。街中には、スーパーやコンビニが全国共通の様相で目に入る。しかし、北海道発祥のコンビニエンスストアや菓子メーカーや家具店が地産地消を売りにしているように、北海道には北海道の生きる道があると思う。広い広いこの大地をしっかりと見つめてみよう。利便性ばかり追求するのは道産子らしくない。広い大地で培われた大きな度量で道産子一人一人がつながりあえたら、北海道の魅力はもっともっと日本全国、そして世界へと発信できるはずだ。

150年の歴史は浅いのかも知れない。それでも、ここ北海道が目指す「みらい日誌」には、相も変わらず、徒歩と車、野生動物と飼育動物、便利と不便がうまく共存した姿を描いてみたい。10年後も50年後も、私達の隣には当たり前のように大自然が息づいていますように。謙虚な気持ちで北の大地とともに生きていきたい。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

中川さん、ありがとうございました。それでは、作品を書いてみてのご感想などをいただきたいと思っています。

● 中川翔真さん（札幌稲雲高校）

今回はこのような賞をいただき、ありがとうございました。正直、緊張しています。

きっかけは国語の授業の時間でした。そのときに、北海道について改めて考えてみた結果、この北の大地が大好きだと感じたので、まだ1年生ですが、将来貢献できるように、これから勉強していきたいと思います。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

ありがとうございました。席にお戻りください。

続きまして、富良野緑峰高校の坪井さん、前にお進みいただき、発表をお願いいたします。

● 坪井古都未さん（富良野緑峰高校）

「農家ってさ、汚れるし、儲からないし、疲れる。それに、虫だって気持ち悪いじゃん。農家なんてやっても良いことなんてないよ。」これは私が小学生の頃、友達に言われた言葉です。この言葉を聞いたとき、とても腹が立ったことを覚えています。私の両親は中富良野で農業を営んでおり、私も小さいころから作業を手伝い、両親の働く姿を見ていたため、そんな友人の言葉が嫌でした。農業をやってみたい、父の代で終わらせたくない。そして、「皆に農業をもっと知ってもらいたい。」と考えはじめました。

そんな思いから、富良野緑峰高校に入学し学んだことが3つあります。

1つ目は、農業は作物を生産するだけではない。加工・販売をすることも大切だ、ということです。今まで私は「作物を栽培する仕事が農業だ。」と思っていましたが、販売会や食品製造の授業を通して、農業に対する見方が変わりました。

2つ目に、以前の私は、「農業は、生産する技術をしっかり学べば良い」と考えていましたが、その生産する技術を支える土台として、土壌、機械、肥料の知識も必要であり、今後は、経営についても大切だと学びました。

3つ目は、先生から教えて頂いた、オーストラリアで農業が人気な理由で、「大好きな家族と1日中一

緒にいられるから。」ということ。私は、この考え方が、前向きで素敵だと思いました。物の見方や考え方は、人それぞれで、それまでの農業に対する見方が変わりました。

しかし、まだまだ男性のイメージが強い農業ですが、今、女性の農業者も増えており、その1人に、安丸千加さんがいます。安丸さんは、曾祖父の代から続く上富良野のメロン農家で、富良野緑峰高校のOGであり、道立農業大学校を卒業し、20歳で就農しました。現在は、「はらぺ娘」という、女性農業者によるネットワークの代表も務めており、その活動は、昨年TVドラマ化されました。私は、こんな身近に、農業に取り組んでいる女性がいた事に、とても嬉しくなりました。そして先日、専攻班活動で、安丸さんとお話しできる機会があり、心に残った事があります。まずは、「農家をやっている、女性だから困ったことは？」という質問に、迷うことなく、「力仕事です。」と答えたことです。「力では父にかないません。それ以外で困ったことはないですよ。」女性だから困ることは沢山あるだろう、と考えていた私は、自分も知らず知らずのうちに農業を男性の仕事と思い込んでいたことに気が付かされました。その後は、農業の魅力や親子対象食育講座で野菜嫌いの子が、取れたてのピーマンを美味しそうに丸かじりした話。そして、進路相談にまで乗っていただき、素敵な時間があっという間に終わり、最後は「今はもう、性別で仕事を選ぶ時代じゃない。ぜひ、頑張ってください。」と応援していただきました。これらの話を聞き、女性農業後継者は珍しいものではないと感じ、私も安丸さんの様に、自分で栽培した作物の良さを、消費者に伝えられる農家になりたいと思いました。そこで、私は、将来に向けて2つのプランを考えました。1つ目は、消費者に自信を持って販売できる「安心・安全」な農産物を目指した、減農薬栽培です。確かに手間もかかりますが、田んぼで蛙が鳴いている風景も、土の中にミミズがいる事も趣があり、その素朴な風景も農業の魅力とすることが出来ると思います。また、以前授業で、有害生物の防除方法は、大きく4つあることを学びました。農薬を使う化学的防除。天敵利用などの生物的防除。マルチや防虫ネットを使う物理的防除。輪作などの耕種的防除です。私は、化学的防除以外の方法を上手に利用し、さらに、生態系に存在する天敵生物などの自然制御機能を有効に活用し、経済的に被害が生じないレベルに発生を抑える、総合的有害生物管理、通称IPMという考え方を取り入れたいと思います。2つ目は、生産だけでなく、6次産業化にも挑戦します。では、6次産業化に大切なことは何だろうと考えました。加工品を作る知識や技術もそうですが、一番はやはり、美味しい原材料を使うことであり、美味しい農産物を生産する技術です。また、「多くの人に農業のことを知ってもらいたい。」との思いから、6次化することで多くの人と関わる機会ができ、その人たちに「農業って、こんないいところだってあるんだよ。」と、農業に対するイメージを少しでもプラスに変えていきたいです。

将来この北海道の大地で農家になりたい。この夢の実現に向けて、残された学校生活で勉強を頑張りたいと思います。授業はもちろん、農業以外の部活動や普段の生活も勉強だと考えます。沢山の人と交流することで、多種多様な意見を知り、受け入れ、自分の物の見方を変え、多くの視点を持つことも大切だと思います。

高校卒業後は、さらに高い技術と、農業経営に必要な知識を学ぶために、道立農業大学校への進学を考えています。

将来、中富良野に戻り、4代続く我が家の農業を父から受け継ぎ、いつの日か、私の子どもが友達から「農業って、すごく良い仕事だよ。」と言ってもらえる農家になります。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

坪井さん、ありがとうございます。それでは、作品を書いてみてのご感想などをいただきたいと思っています。

● 坪井古都未さん（富良野緑峰高校）

私が、この作文で一番に伝えたかったことは、私は農家の長女で両親の働く姿を小さい頃から見ているため、農業をやりたいと思いました。でも、今でも農業後継者は男性だというイメージが強いですが、それでも私は農家になりたいということです。

もうすぐ、北海道は、「北海道」と命名されて 150 年ということで、本州とかに比べて歴史は浅いです。でも、その歴史が浅いことが、私は逆にいいことだと思っています。それは、北海道は新しいモノを受け入れる地域性というものがあると思うので、ですから私は、将来、この大好きな北海道で農家になろうという気持ちが作文を書いて、さらに強くなりました。

ありがとうございました

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

ありがとうございました。

続きまして、札幌国際情報高校の山岸さんからは、事前に録音したものをいただいております。まずは、作品の発表でございます。

● 山岸志穂さん（札幌国際情報高校）

武四郎の夢。

山岸志穂。

「蝦夷地に北加伊道と名付けた。」これが私の知っていた松浦武四郎でした。しかし、武四郎について調べていくうちに、彼の功績はそれだけではないことがわかりました。

武四郎は、若い時から日本中を旅していました。蝦夷地探索には特に多くの時間を費やし、アイヌ民族と交流しました。彼が持っていたチャレンジスピリットや多様性への理解からは、現代の私たちにも学ぶべきものがあります。

グローバル化が進む今、国際社会で活躍できる人材「グローバルシチズン」の育成が求められています。より高度な語学教育や情報教育の必要性が叫ばれていますが、本当に必要なのは、武四郎のような志を持ち、それを実現しようとする勇氣ある「人」ではないでしょうか。

知らない土地に臆せずに出発しようとする、チャレンジスピリットは世界に挑むうえで必要です。蝦夷地という「異国の地」で、アイヌ民族という「異文化の人々」と打ち解けるコミュニケーション能力は、異国間の交渉に必須です。

何よりも一番大切なのは多様性への理解でしょう。武四郎は、アイヌ民族と交流していくにつれ、自然や命を大切にするアイヌ文化を尊敬するようになりました。当時は、アイヌ文化を遅れた文化とみなす風潮があり、武四郎の考えが理解されることはありませんでした。

様々な民族、宗教、文化が入り混じっているこの世界、自らの価値観を押し付け、その他の考えを否定する人が少なくないように思われます。しかし、このような差別的な考えでは、相手を見下し、全うに人間関係築くことなどできません。だからこそ、多様性への理解が不可欠なのです。

「アイヌ民族・文化の保護と尊厳の回復」

北海道開拓の判官であった武四郎が持ち続けた夢は、未だに実現しているとはいえません。しかし今後、武四郎のような志と実行力を持った若者が次つぎと現れれば、近い将来、彼の夢は実現されることでしょう。そして、北海道からグローバルシチズンと呼べる多くの人々が世界に向けて羽ばたき、北海道の

素晴らしさを各国の人々に伝え広めていくことも遠い未来の話ではないでしょう。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

続きまして、作品を書きかきの感想になります。

● 山岸志穂さん（札幌国際情報高校）

札幌国際情報高校の山岸です。今回は貴重な機会をお与えいただき、大変ありがとうございました。自分が考えている「未来」とはどのようなものか。私は、この問いにすぐに答えることができませんでした。なぜなら、答えがないものが「未来」だと考えていたからです。どう未来を思い描けばよいか迷っていたとき、とある先生が、「せっかく松浦武四郎を題材にした作文なのだから、松浦武四郎について調べてみるといい」と助言してくれました。彼がどのような人物でどのようなことをしたのか、作文にも書いたとおり、私が知っていたものは僅かでした。松浦武四郎という人物を調べて、私が出会ったのは、どこまでも旅をしようとし、アイヌ民族に敬意を表した熱い男。彼の志をどう表したらいいか、そう考えた時、ふと思い出したのは、学校でよく耳にする「グローバルシチズン」の存在でした。武四郎の時代、蝦夷地に渡りアイヌ民族と交流するなどということは、今の時代に私達が海外に渡って、その地の人々と交流することよりも遙かに困難なことであったことは容易に想像がつきます。まして、優位な立場である、いわゆる和人の立場であった彼が、アイヌ民族に深い敬意を抱き、制服ではなく融和を目指したのです。そのような複眼的な価値観を持ち得た彼は、彼の時代の「グローバルシチズン」だったのだと思います。

私自身もこの北海道に生を受け、松浦武四郎の夢に連なる者として、彼のスピリットを検証し、北海道をベースとするグローバルシチズンであるように努力していきます。高校卒業は、松浦武四郎のように、全国を旅してみたいと考えています。万里の道を行き、万国の友を持つ人間であろうと思います。

武四郎が持ち続けた夢は、様々な人の手によって、少しずつ実現してきました。冒頭で私は、「答えがないものが未来だ」と言いました。しかし、よく考えてみると、「未来とは多くの夢が実現した結晶ではないか」と気づいたので。北海道の未来は多くの人の夢を載せ、その先の道へつながっていくのです。

ご静聴ありがとうございました。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

山岸さんありがとうございました。

「北海道みらい日誌」につきましては、以上でございます。

これらの作品の趣旨につきましては、150 年事業の基本方針にも可能な限り反映していきたいと考えております。また、今後、事業のPR冊子などを作成する際には、作品の本文をご紹介することも検討しているところでございます。

最後になりますけれども、ご応募いただいた全ての方々、募集にご協力をいただいた北海道教育委員会、札幌市教育委員会、ご指導いただきました各学校の先生方、そして J A 北海道中央会様にも改めて感謝を申し上げます。以上でございます。

● 山口委員長（北海道大学）

それでは議事の 2 番目に移りたいと思います。「基本方針の原案」について、事務局から説明をお願いいたします。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

それでは、【資料 2-1】北海道 150 年事業の基本方針の原案をご覧ください。ポイントのみの説明となります。よろしくお願いいたします。

まずは資料の表紙の裏になります。「北海道 150 年」について触れております。

1869 年（明治 2 年）、旧暦の 7 月 17 日に、「蝦夷地」に代わるものとして、松浦武四郎が「北加伊道」を含む名称を政府に提案されております。いわば北海道の名付け親であり、北海道に大きな足跡を残されました松浦武四郎を、北海道 150 年事業のキーパーソンとしたいと考えております。ページの下には、基本方針の作成の趣旨を記載しております。

1 ページになります。基本理念の後段で、「新しい北海道を自分達の方でつくっていく気概をもつ」ことや、「北海道の新しい価値、誇るべき価値を国内外に発信する」ことなどを記載しております。

また、150 年事業のテーマは 3 つあります。このテーマに沿ったキャッチフレーズといたしまして、北海道の新たなキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道 Hokkaido. Expanding Horizons.」を使用したいと考えています。年内に作成いたしますロゴマークともうまく組み合わせまして、事業全体の PR や参加者の一体感を醸成していきたいと考えております。

基本姿勢の「道民一体」の説明につきましては、「多くの道民などの参加によって、北海道全体を盛り上げる」旨記載をしております。

2 ページ、事業の概要についてまとめております。150 年事業について、実行委員会が行う「記念セレモニー」と、道民、団体、企業などの皆様が行う「北海道みらい事業」に大きく分けて整理しております。下の図のローマ数字の I 及び II の部分になります。

また、あわせまして、ローマ数字 IV 及び V の部分ですけれども、実行委員会が事業実施のサポートを行うことを検討しております。これは後ほど 7 ページで触れたいと思います。

なお、この節目を契機といたしまして、道や関係機関等が、継続的に取り組むものにつきましても、「III 関連推進施策」として検討を行ってまいります。

事業の実施期間は、原則、平成 30 年の 1 月から 12 月としております。事業の展開エリアは、記載のとおりでございます。

3 ページから 6 ページにかけまして、各事業の実施の考え方等について記載をしております。各事業のページには、囲みの部分がございます。各事業に関連する企画や取組の例を記載しておりますので、ご審議をいただければと思います。

これまでの会議でのご議論や道民の皆様からいただいたご意見、これは【参考資料 2】でまとめておりますが、こうしたものを踏まえまして整理をしたものでございます。内容としては、すでに準備に着手されているものですか、検討・構想段階のものなど様々な状況となっております。

4 ページに、事業の＜登録＞について記載しております。実行委員会で定めた要件を満たす事業をエントリーする形、簡単な手順を、今後検討したいと考えております。

7 ページ、「北海道みらい事業」の支援についてでございます。実施主体からの提案や相談を受けまして、実行委員会が事業の準備や実施について支援を行うことを考えております。図にありますとおり、実行委員会の中に個別事業を支援するチームを置いてサポートしていけたらいいのかなと考えております。

8 ページ、PR についてでございます。イメージコンテンツや様々な手法を用いまして、多くの道民の皆様方に、150 年事業の取組を知っていただき、共感が広がるよう展開してまいります。平成 29 年 10

月から平成30年3月までの間、この半年間をPRの強化期間と位置づけて活動してまいります。

9ページ、推進体制でございます。官民の幅広いメンバーからなる「実行委員会」を10月頃に立ち上げます。活動内容や体制の案については、記載のとおりとなっております。

最後、スケジュールでございますけれども、平成30年の1年間を通じまして各種の取組が展開されることを表の中でお示ししております。以上、原案の内容についてご審議いただきたいと思っております。

続きまして、【資料2-2】をご覧ください。基本方針は、本日の議論を踏まえまして、事務局で原案を取りまとめます。この原案に関して、道民検討会議として8月末にかけて広く意見募集を行いたいと考えておりますので、皆様にご審議をいただきたいと思っております。

以上でございます。

● 山口委員長（北海道大学）

ありがとうございました。ただ今、基本方針（原案）の検討案と、道民から意見を聴く手続きについて説明がありました。この事務局の案を参考として、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

それでは、石森委員から反時計回りでお願いします。大変恐縮ですが、1人3分程度でお願いいたします。

● 石森委員（北海道博物館）

この原案読ませていただきました。非常に的確にまとめられているものと認識しております。ただ、1ページのところで、基本理念、テーマ、基本姿勢がありますが、これにつきまして1つだけ注文を付けたいと思っております。基本姿勢の中に「未来志向」「価値創造」「道民一体」ということがありますが、先ほどの山岸志穂さん、最優秀賞をとられた中にもありましたけれども、グローバルシチズンという問題、これは非常にこれからの未来の北海道を考えるときに極めて重要になりますので、むしろ基本姿勢の中に「世界の中の北海道」といったようなことが必要ではないかと思っております。本日、サッポロビールの生方代表もいらっしゃっておりますけれども、北海道L i k e r s をサッポロビールが運営しておりますが、私が聞くとところでは150万近い人が利用している。そのうちの8割ぐらいが外国人と伺っております。むしろ北海道大好き人間は、外にいるんだという認識。北海道民だけの北海道ではないということでもあります。台湾にも、本日、竹田社長がおられますがたくさんのファイターズファンがいるということでもありますし、お隣の伊藤さんが、今、“No Maps”という新しいイベントを北海道に興す。これも確実に10年後には世界中から人が集まるものになりますから、ぜひ150年記念事業でも未来を見据えて「世界の中の北海道」という視点が必要ではないかと思っております。

それから続きまして、5ページのところであります。これは、北海道みらい事業であります。この中の真ん中ぐらいに、クロポツの4つめ、北海道価値の再発見事業というのがあります。その1つめが北海道遺産プロジェクトの活性化ということでもあります。私は辻井達一先生のあとを継ぎまして、現在、北海道遺産協議会の会長を務めております。まさに北海道遺産プロジェクトを、こういう形で取り上げていただいていることについては嬉しいことでもありますし、2001年に、道民参画で52件選ばれておりますけれども、これを150年記念事業との関わりの中で、特に、より若い皆様方にこの北海道遺産というものの価値を再認識していただき、また北海道遺産協議会としても、52件を超えて、今、新たなものを、どういう風に認定していくかということを考えておりますので、2018年、こ

の記念事業とあわせて私ども北海道遺産協議会としても新たな事業を進めたいと思っております。

● 伊藤委員（クリプトン・フューチャー・メディア(株)）

クリプトン・フューチャー・メディアの伊藤です。

この基本方針をずっと読ませていただきまして、方針としてはよくまとまっているなという感じがしました。

先ほどの3名のみらい日誌、3名の学生の皆さんの話を聞きまして、ちょっと思ったところがありました。中川くん、坪井さん、山岸さん、それぞれがいいポイントを突いているように思いました。

中川くんの作品ですけれども、「北海道らしさ」というものを失わずに、北海道の未来をどう成形していくかという点がポイントという感じがいたしました。

それから、坪井さんは、農業こそが北海道の未来のキーポイントになりますけれども、6次産業みたいな形で、どう付加価値をつけていくかという視点がこれから大事だという点を述べていたのかなと思います。

最後、山岸さんですけれども、グローバルシチズン、国際化というような観点で武四郎さんのことを書かれていたと思います。

お三方の3つの考え方を、この基本方針の中にどう盛り込んでいくべきかと私なりにちょっと思ったことをお話しします。まず私は、2つの視点が重要と思っています。1つは教育的な視点、もう1つは経済的な視点です。北海道150年を契機に、この2つの視点を北海道に住む我々自身がしっかりと考え、自ら変化していくかということがすごく大事なのかなと思います。

例えば、デザイン等のクリエイターとか起業家、新規事業を発想できる人材は、北海道に不足していますが、産業に付加価値を生むそういった人材を育成する観点で教育し、これから北海道の未来を担う人材をどんどん増やしていくことがポイントだと思っています。民間の企業やクリエイターを教員として活用することも効果大です。また、英語など語学教育を受けたグローバル人材の育成も重要です。なぜなら、いまインターネットを通じて世界の大学の最先端の授業（英語）を受けることができます。それにより発展途上国がどんどんキャッチアップしているという状況があります。北海道に住んでいる我々も、インターネットを通じた教育（英語）を享受することができますから、例えば、教育制度の中でも英語についてもっと深くカリキュラムに盛り込むとか、英語力を高める視点を基本方針に盛り込んでいけないか、と思います。

それから、経済な視点に関しては、例えば北海道150年記念ファンドみたいなものを設立して、何かこれから新しい事業を興したい、実現していきたいという方々に対して、資金的バックアップができるような体制を作っていくと、記念事業として有意義なのかなというふうに考えました。以上です。

● 生方委員（サッポロビール(株)）

サッポロビールの生方です。

先ほど3名からの「みらい日誌」の発表がありました。改めて、北海道の良さを深く知ることができました。特に若い皆さんがここまできちんと考えられていることに感銘を受けました。

この基本方針につきましては、理念から始まりまして、全体的によくまとめていると思いますし、特にこの理念にある「北海道の新しい価値、誇るべき価値を共有し」という部分については、方向性としては2点あると思います。

1つには、道内の皆さんがしっかりと道内の良さ、価値をきちんと知り合うことが非常に重要と思

います。例えば、道民の皆さんがいつも接点を持つ流通企業とか、飲食店とか、あるいは自治体のイベントとか、いろんな機会で、道内の良さを発信する場を設ける。企業が連動しながら、そういう場を設けていくことで、お客様が、道内にはこんな良い物がある、ということ、日頃接する場で感じていただく、ということが非常に重要だと思います。

2つ目は、先ほどから出ていますとおり、道外の皆さんから見た北海道の良さを知ることです。北海道出身者が道外に出られて、あらためて北海道の良さを認識されている方はたくさんいらっしゃると思います。そういう方の意見なりアンケートをしっかりと把握して、それをまとめられて、どういう点が他エリアに比べて良いのか、というところをしっかりと認識する必要があると思います。

また、先ほどからグローバルの話が出ています。グローバルは、これから避けては通れない流れだと思いますし、インバウンドのお客さんもたくさん来道しています。そうしますと、やはり海外から見た北海道の良さというのは、また違うものも出てくると思いますので、それを把握した上で、全体的にそういう北海道の良さを道民の皆様と共有するというのが、重要だと思います。

まあ、その手段として発信、観光客が刺激を受ける、というのが非常に重要だと思いますが、是非ともそれは共有化したいなということをお願いしたいと思います。

● 落合委員（(株)日本旅行北海道）

日本旅行の落合でございます。

まずは出だし、3人の高校生の立派な作品を聞かせていただきました。私には書けないのではないかと、それから、将来が少し楽しみだなって感じがしました。坪井さんには、最初から最後まで一切（原稿を）読まずに、よく話されたということで感動しました。後でコツを教えてください。

まあ、私の話としては、いろんな資料を見させていただきました。特に、小磯先生のワーキングの方で、大変苦勞された様子も見させていただきました。できあがってきたものを拝見しますと、よくできていると思います。2年後という形になると思うのですが、来年から本当にPRのところが重要になってくると思います。北海道150年、短いといえば短い。そうはいいながら、アメリカ合衆国も短い間でもしっかりと歴史がありますから、それをしっかりPRしていけばよいと思います。そのためには、記念セレモニーなんかのところにも出てくるのですけれども、道民からの寄附、クラウドファンディングの話も出ておりますが、北海道民、北海道から各地に行った方々、それと海外の方も含めて、しっかりした取組が出来れば、結構なものが想定できるのではないかなと思います。私どもも、仕事とは関係なく、クラウドファンディングの経験がありますが、充分効果が出ておりますので、幅広くという中では一つのいいアイデアじゃないかなと思います。

それと同時に、商工会議所連合会だとかいろいろな経済団体が後ろについて、私ども企業も含めてですね、150年というところ見据えて、こんなことをやるのだということで、民間の資金も必要になってくると思いますので、その辺は、私どもも大いに応援していきたいと考えてございます。

それから、この間新聞で見ましたが、松阪市長からのドラマを作る提案といったものがありました。これも、せっかくのドラマですから、やっぱりみんなで応援できるようになれば応援していきたい。どんどん来年から気運を盛り上げて実際の実施年度になったら、大成功となるような形にもっていけたらなと思っております。以上でございます。

● 加藤委員（(公社)北海道アイヌ協会）

加藤と申します。お世話になっております。

最初に、作文の発表を聞いていて、感動、ただ感動しかありませんですけども。特に、中川さんもそうです。このスマホで（半径）1メートルしか見ていないというこの社会、これから先どうなるのだろうという気持ちが先に走りましたけれども。親指が腱鞘炎になって困って、眼もダメになるのかなと思ったり、心配の未来もありますけれども。

前回もこの会議の中で、私もいつもそう思っていることが一つあるのですけれども、最近、JRが、どこもダメだここもダメだと、閉めることだけが先に走っていて、ああ、明治に戻るのかなんて半分思ったりもしていますけれども、今、意見がありましたように、北海道の外から見た良さを、どのようにしていくのかと言ったときに、それが通じなくなってくる時代がくるのかなと半分思ったりもしておりました。

今もおっしゃられておりましたけれども、坪井さんの作文を見てね、非常に素晴らしいこと、何もペーパー無しで全部これ2ページをしゃべられるっていうのだから、素晴らしい思いやりを持っている方なのだなと思って。こういう方がこれから北海道で息づいていくっていうことは素晴らしいことに繋がっていくなと思っております。スマホどころじゃない話になってくると思っています。

それに、山岸さんの話を聞いていて、「グローバル」っていうことでいきますと、前回の会議の中で「しがらみのない北海道」、これと合わせると、非常にこれから先いい話になっていくなと思って聞いてもおりました。

それで、この基本的な考え方、素晴らしくできているペーパーを見ましてね、基本理念のところ、最初に「アイヌ文化や縄文文化」ときておりますけれども、先日、ついこの間の話なんですけれども、根室、標津のポー川遺跡で慰霊祭を行ったんですよ。ポー川遺跡、知事は一度も行ってないですよ。多分行ってないと思うんです。一度行ったらいいと思う。皆様も行ったらいいと思う。ポー川遺跡に何があるかといったら、春になったら雪解けで一番よくわかる竪穴式住居が4千4百もあるんですよ。4千4百ですよ、何万人も住んでいたということなのです。あの場所で。この間、文科省に行きましても、北大にも審議官が来ましたが、局長にもその話をしたのです。ポー川に行つてごらんと。この遺跡に、4千4百も竪穴式住居跡があるんだと。それ以上あるとも言われています。このことを黙って寝かす必要はないと。私はこのことで、道議会の喜多前議長さんにも、神戸（元）議長さんにも、現在の（遠藤）連議長さんにも、このことを言ってね、北海道としてきちんとしなきゃだめだよと。こんな立派な遺跡があるのに、このまま放っておく手はないだろうと。ここで、基本的に、アイヌが先じゃなくて縄文文化が先に来て、アイヌが来ればいいのになと思いつながら、私の浅はかな考えの一つ目。そこなんです。

もう一つ、ついこの間、北海道新聞で報道されておりましたけれども、7月29日開催の全国知事会での高橋知事の発言、2020東京オリンピック・パラリンピックにおけるアイヌ文化の発信に関連し、「日本文化や社会的奥深さを示す意味で重要だ」と。この意味は大きい話なんです。このことを踏まえて、これからは、この北海道をどのように位置づけていくのか、ということになるかと思えます。この中で、もう一つ、基本姿勢の中で、「道民一体」とありますけれども、このほかに、北海道の特性である自然環境の持続可能性に努めます、という趣旨で、「北の大地（の保持）」がいいのかなと、私なりに浅はかな知恵で思っておりました。以上、ありがとうございます。

● 菊谷委員（北海道市長会／伊達市長）

伊達市の菊谷でございます。皆さんから感想が言われましたけれども、私、全く同感でございます。素晴らしい内容だなと思えました。

ちなみに私、1年に1回ですね、伊達市内の中学生と、高校受験が終わった2日後か3日後ぐらいに、話し合いというか、お話をしている色々な意見を聴くというのをやっていますけれども、最近の感想ですけれども、すごく地元愛が増えてきて、手を挙げてもらうのですけれども、「将来どこに住みたいですか」って聞きましたら、地元に住みたいというのが3割か4割ぐらいが増えてまいりました。私が市長になったころ、地元に残りたいっていうのはほとんどいなかったんですけれども、最近はそういう子どもさんが増えてきているなという感じがします。

それから、テーマの3に、「多様な魅力を世界に広げる」というのがすごくいいなという感じがします。「多様性」という言葉も先ほど出ましたけれども、最近ちょっと感じますのは、北海道観光、「食」とか言ったら、割と限定的なイメージが強いので、もう少し「多様性」というものを打ち出せばいいのかなというのと、観光地というどうしてもですね、メジャーな函館とか小樽とかですね、そういうところがたくさん出てくるので、「北海道」という言葉を使うとちょっと広がりがあるので、是非その「多様性」ということを大事にしていだければと思います。

もう一つは「交流」だと思います。これはJRにですね、この間、期成会で要望に行ったときをお願いしたのですけれども、かつてですね、JRで街歩きってやっていたのです。例えば、伊達市に札幌から募集して、伊達紋別駅に降りていただいて、何時間か街歩きをしてもらおうと。そして、また帰ってもらうと。こういう取組ですね。同じ北海道にいながら、意外と北海道の中を知らない人がたくさんいるのではないかということ。

それと、身近な例で言いますと、伊達紋別駅ってあるんですが、かつては伊達紋別駅と倶知安駅をローカル線が走っていたんですが、昭和61年に廃止されて、今はバスが走っておりますけれども、実は、多分伊達市民の9割の方は知らない、バスが走っていること自体。それで、先日、倶知安町長にもお願いしたのですが、バスは走っていても知らない市民がほとんどなのに、それを使わない手はないのではないかということで、是非そういう意味で交流ですね、先ほどJRの話が出ましたけれども、もう少し「交流」というテーマでですね、北海道の中でお互いを知ることが大事かなという気がしておりますので、この3の「多様性」という中にもですね、交流という意味も含めて考えていただければいいのかなという気がいたします。以上です。

● 小磯委員（北海道大学公共政策大学院）

小磯でございます。

私の立場としては、みらいワーキング、10名のスタッフで検討してまいりまして、この基本方針の原案の作成に向けて、6月20日、7月20日と2回に分けて、かなり活発な意見交換をして、山谷副知事も入っていただきました。

従いまして、私がこの原案に対して、個人的な意見を申し上げるというよりは、みらいワーキングの中でどういう議論があり、どういう意見の中で原案がまとめられたのか、私の方から紹介させていただきたいと思います。

みらいワーキングは30代、40代の大変若手の皆さん方で、2回の検討会も大変活発な、幅広い、しかも前向きな積極的な意見が多く出されました。その思いを集約するのはなかなか難しいのですが、大きく皆さん方の声を集約して2つ紹介します。

1つは、やはり150年事業の意義。これまでの150年の先人への感謝と敬意を込めて、150年間の歴史というものをしっかり伝えていく役割が我々にあるのではないかと。それが結果的には、この先の50年後、200年にかけての大変貴重な北海道の財産になるのではないかと、そういう思いの声がひと

つ。

それから、もう1点、先ほど菊谷市長も仰いましたけれども、我々北海道に関わる者にとって、北海道のことが実はよくわかっていない。しっかり、足元の北海道というものを見つめ直していく、理解を深めていく契機にしていくという考え方が大事ではないかと。

こういうところが、ワーキングでの原案を取りまとめるに当たっての意見というところで、まずご紹介しておきます。

それから、特に7月の第2回ではかなり活発な意見交換がありまして、その中で是非ご紹介しておきたい意見がございます。それは、ワーキングの総意でもあると思うのですが、1つは、この150年事業というのは、様々な人々を巻き込んで進めていく事業であると。これが最大のポイントではないかなと。これは、わかりやすく言うと、道庁がやっている事業ということではなくて、北海道の道民全てと一緒に取り組んでいく事業、いかに様々な人々を巻き込んでいくかということが大事であると。

もう1つは、地域、空間の視点です。やはり札幌だけで取り組まれている事業ではなくて、北海道の各地でいろいろな形で展開されていく事業であるべきと。

この2つがやっぱり150年事業として大事なところではないかなと。

わかりやすく言えば、道庁だけがやっている事業ではない。札幌だけでやっている事業だけではない。北海道のみんなが全道で取り組んでいる事業。そういう思いで是非基本方針を構築して欲しい、そういう声が我々ワーキングの中でありましたので、これだけをご紹介しておきたいなと思います。

最後に1点。実は、前回のワーキングの中で、1人のメンバーが、彼女は木古内の道の駅で活動している方ですが、既に150年事業を、自分達が作っている買い物袋とかTシャツに入れ込んで実践しているという、そういう紹介がありました。大事なことは、自分で150年事業の意味合いの中で何ができるかを考え、それぞれが自ら実践していくことではないか。それが150年事業につながっていくということが、事業の進め方として大事なんじゃないかなということを感じましたので、最後にご紹介しておきたいと思います。以上です。

● 西條委員（西條産業(株)）

西條と申します。

私、前回欠席したものですから、送っていただいた議事録などを読ませていただいて、それぞれの方からいろいろな意見をお出しになって、それが基本方針の中にかかなり充実した内容で盛り込まれているなというふうに思っておりました。

今更という感じもしますけれども、何人かの方もおっしゃっていましたが、やっぱり北海道の歴史を紐解くと、どうしてもアイヌの方々の歴史というのが欠かせないものだというふうに思います。私は今北海道のニュージーランド連絡協議会の会長をさせていただいているのですが、北海道とニュージーランドというのは非常に似ているのですよね。いわゆる農業国でもあるし、ニュージーランドにマオリ族という原住民がいるのですけれども、すごく似ているなと思っていて、ニュージーランドでは、確かワイタング条約というので、白人とマオリ族とが契約を結んで、かなりトラブルがたくさん、いわゆる戦争というか、いざこざがあったのですけれども、アイヌの方の場合はそこまでいかににしても、非常に北海道に似ているところがあるので、何かニュージーランドとの関係性というのは、150年のひとつの事業の中で持つことができないかなというのは、私の個人的な思いかもしれませんが、そういうふうに思いました。

それと、テーマが3つあって、かなりこれも非常に検討された内容だと思いますけれども、151年目からの将来の一步を踏み出すんだという部分については、やっぱり将来を担うのは若い子ども達というか青少年の方々が中心になるでしょうから、先ほど石森先生がおっしゃった「世界の中の北海道」というか、国際社会にどうグローバルな人間を育てていくかというものも含めると、ここの部分でもうちょっと具体的なそういった言葉も盛り込んでいくといいのかなというふうに思いました。グローバルという意識の中では、北海道に多くの姉妹都市でありますとか友好都市でありますとか、そういうのを結んでいるところがたくさんあると思いますので、名誉領事になっている方もいると思います。そういう方々を中心に、それらの国の方々が一同に介して何かイベントができないかなということも考えております。

小樽のことを申し上げて恐縮ですけれども、観光協会の会長をやっているものですから、昨年、800万人近い観光客が小樽にお越し頂いて、インバウンドの方もかなり多いです。それは誘致活動を熱心にやってきた成果が現れているというのもあるのですけれども、まだまだその部分は伸びしろがたくさんあるわけですね。前にオーストラリアに行ったときに、ニセコ場所は分かるんだけど、小樽の場所とか札幌の場所とかよく分からない、どこに位置しているのかわからないということで愕然としちゃった思いがありますけれども、やっぱりまだまだそういう意味でPRするというのは否めないと思いますから、北海道の存在感、それぞれのマチの存在感をどうやって上げるかというのがひとつの課題であります。その中で、自然でありますとか、歴史でありますとか、文化、スポーツ、音楽そういったものを取り込んだ一大イベントをしながらいろいろなツーリズム観光というものを、観光大国としての北海道をもっともっとアピールしていくということができればいいなと思います。

最後に、何かの時に言った記憶があるのですけれども、5ページのところに、北方領土関連事業と書いてあります。これは非常に政治的にも難しいというか、繊細なテーマだと思いますけれども、やっぱり、アイヌの方々の歴史を紐解いていきますと、どうしても北方領土とかカムチャッカとかに繋がっていくと思うのです。意外と北海道の人達は、これに関しては関心がないのかあえて言わないようにしているのかわかりませんが、何かしら北海道でそういう声が上がらないとおかしいと私は思います。ただ、これはやり方が非常に難しいので、そのへんを慎重に考えながら、何かそういうことをアピールしていけたらいいのかなというふうに思いました。以上でございます。

● 佐々木委員（(公財)北海道青少年育成協会）

佐々木でございます。

読ませて頂きまして、「新しい価値」という言葉が非常に多い印象を受けます。当然、価値創造を目指しているわけですから、新しい価値を追求していくと、先ほど発表していただいた3人の高校生の皆さんのところに到達するのかなという思いが非常にいたしました。

中川さんの、便利と不便さがうまく共存するとか、コンビニだとかスマホの利便性を我々否定することはできませんけれども、それだけではないということでもあります。だから、多様性というところが出てくるでしょうし、新しいことを受け入れるという坪井さんのご指摘も非常に期待ができます。こういうところにヒントだとか到達点があるのかなと思って聞いておりました。この分野というのは、実は、昔からアイヌ文化が持っていた思想であります。アイヌ文化ありきという考え方をするのではなくて、新しい価値を追求していくとアイヌ文化に到達するというのでしょうか、そういう組み立てもあるのではないかなというふうに先程来感じております。

それから、もう1つ申し上げたいのは、北海道大学が北海道の文化・歴史産業の再発見をする宝庫で

あるということです。研究機関でありますので、活用は簡単ではないかもしれませんが、北キャンパス、是非とりあげてみたいという印象を持っております。

それから、私、カルチャーナイトという地域文化活動をやっているのですが、今年、親子で楽しむ北大ナイトツアーというのを実施しました。ボランティアで学生さんが案内をしてくださるのですが、自分で勉強して、わかりやすい言葉で説明をしてくださるのですが、この学生さん、ほとんどが道外の学生さん。この北大の緑、北大の素晴らしさを熱く語るわけです。そういう現実があります。この企画に関しては、120組の親子をお断りしたという事情がありまして、ニーズがあるのだなというふうに思っております。北海道大学総長に汗をかいていただくことを期待したいと思います。

この会議、北海道青少年育成協会の立場で参加しておりますので、最近の子どもの変化みたいなものをひとつご紹介したいと思います。非行少年とか犯罪というのは激減しております。関係者の努力とか環境の変化を背景にして、激減しておりますが、こういう変化が起きてきております。他人への「関心」とか、「愛情」とか、「信頼感」をなくしている傾向があります。「社会性の欠如」というふうに表現されるのですが、人との関わり不足の育成歴が非常に影響を与えていることが推測されます。自分が普段生活している世界が自分の身体で実感できない、そういう状況もあるかと思えます。子どものところにこういう変化が現れているのを私ども問題意識を持っていろいろ取り組んでいるわけでありまして、この150年のいろいろな企画の中に、「楽しむ」とか「学ぶ」とか「体験する」とか「交流する」とか、そういう実感できる要素を、事業の中にたくさん取り入れていただいて、結果として青少年を育むところに持っていくことを心から期待したいと思います。

● 鈴木委員（(株)クリエイティブオフィスキュー）

クリエイティブオフィスキューの鈴木でございます。

北海道みらい日誌の最優秀作品3作を読ませていただき、我々が普段忘れていたようなことや北海道に対する愛を改めて感じることができました。北海道の未来を担う若い人達に、北海道150年の事業をもっと知ってもらいたいという思いを改めて持ったと同時に、この基本方針を読ませていただき、広報の重要性を強く感じました。メディアに関わる立場からも、メディアをどのように活用していくのか、どのようにジョイントしていくのかということがすごく大事だと思います。まず北海道が150年を迎えるということそのものを、テレビ、ラジオ、新聞をはじめ、インターネットなど様々なメディアを活用して、たくさんの人達に伝えていくべきであると思いました。特に、やはり先ほどの高校生を中心に若い世代の方達には、もっと知ってもらい活発な意見をもらいたいところだと思います。

それと、コンテンツ化です。前回もお話させていただきましたが、こういうことをどのようにコンテンツ化し、それを道内はもちろんのこと、道外、海外の方に伝えていくのかということもあわせて考えていくことが必要であると思っております。

先日、地元への愛着度と自慢度を尋ねる「都道府県出身者による郷土愛ランキング」で北海道はナンバー1になったという記事を読みました。北海道を好きだという人は本当にたくさんいると思います。そういう人達にどう関わってもらおうかということも考えるべきではないでしょうか。

先々月、弊社の大泉洋も参加した「北海道会」という北海道出身のタレントやアーティストによる、いわゆる飲み会が東京でありました。例えば、加藤浩次さんやタカアンドトシさん、大黒摩季さん、GLAYさん等総勢22名が参加した会なのですが、それを、タカアンドトシのタカさんがインスタグラムに投稿したことが、インターネットニュースのトップ記事になりました。所属事務所の枠を超えて自分達の意志で「北海道大好きだよね」「集まろうよ」「北海道の話しようよ」という会でしたが、これ

が若い人たちの間で非常に話題になり「北海道ってやっぱり素敵だね」とか「北海道人ってやっぱり地元のことを大事にしてるんだね」というたくさんコメントが寄せられていました。これも、いわゆるメディアの1つだと思うのです。SNSを活用したコミュニケーションは、特に若い世代への情報発信力が高いと考えます。

それから、小磯委員が先ほどおっしゃっていた、地域としてどう取り組んでいくかということもすごく重要だと思います。地域の優位性をピックアップし、札幌が地域と地域をつなぐハブになって、北海道全体が連携して取り組んでいく。それがいわゆる「北海道プライオリティ」に繋がって、北海道150年を迎えられたらと思いました。ありがとうございます。

● 竹田委員（株）北海道日本ハムファイターズ

ファイターズの竹田です。

まずは、「北海道みらい日誌」を発表していただきましたお三方の皆さん、本当にお見事でした。これからの人生ですね、皆さん、一人ひとりの夢やロマンの実現に向かってしっかりと歩んでほしいと思います。

中川くんね、是非、オンリー北海道、北の大地、北海道らしさを追求して行って下さい。

坪井さん、農業は本当に良い仕事です。原材料を大切にして、本物を追求して行って下さい。

山岸さん、松浦武四郎の夢を、チャレンジスピリット、これを追求して行って下さい。

私からは、今回の事務局からご説明のあった基本方針（原案）、全て受け入れます。その中で、1個だけお願いしたいことは、昨日、オリンピックが開幕しました。平和の祭典ですね。スポーツの祭典、オリンピックが開幕しました。そのときの開幕セレモニーを、僕は強烈な感動を持って見ていました。まずは、住民インディオが現れました。そこへポルトガル人が来ました。アフリカ人が入りました。日本人の技術が入ってきました。そして、今後、未来に向けて、例えば、美しい自然を、美しい地球を大切にしていこうよと。温暖化も踏まえて提案をしていました。

僕はこれを見ていて、今回、武四郎の人生、又はチャレンジをですね、今、知らない人が多いと思います。北海道538万人の道民の方で、松浦武四郎をよく知っているよという方は、どれくらいいるのでしょうか。僕の感覚では5%くらいしかいないのではないかと。失礼しました。もっと知っていると思いたいです。是非、今回のこの企画を通して、100%の方が武四郎を知って、武四郎の偉業を大いに称え、そういうところに結び付けて行ってほしいですし、その時に、先ほど加藤さんから出ました、縄文文化とかアイヌ文化、その歴史、それと一緒に共生してきたんだよ、共存・共栄してきたんだよというところを、強く留めて欲しいなと、今後に繋げて行ってほしいなと、そういう感想を持って聞いておりました

私ども、スポーツを通してコミュニケーションを大切にしています。高橋知事、179市町村応援大使の団長をしていただいておりますけれども、本当に、地域社会と共生していく、素晴らしいことだと思います。地道に活動してまいりますので、どうぞファイターズのことを今後も応援よろしくお願いたします。以上です。

● 谷本常務理事（北海道町村会【代理出席】）

北海道町村会の谷本です。前回に引き続きまして、棚野会長は公務により欠席で大変申し訳ございません。

150年事業については会長ともいろいろお話ししまして、会長の意見としては、この基本方針に特に異

存はございません。元々会長は未来志向の考えを持った方なのですが、今回、1つだけ意見を言われたのは、3つのテーマのうち、どれを重視するのかということで、やはり150年という節目を振り返って、開拓の礎となったアイヌの方々の歴史や文化、生活、こういったものを振り返って後世に伝えていくことが最も大事ではないかという意見でございました。

関連しまして、先週、三重県の松阪市長さんが来道されまして、知事のところで、私ども町村会にも来られまして、松浦武四郎のドラマ化の話がされました。昨年、NHKの歴史秘話ヒストリアという番組で武四郎の話が放送されましたが、これはどちらかと言うと、北海道の話というよりも旅好きという武四郎の人間性といいたいまいしょうか、人物像が中心の内容でございまして、北海道民から見るとちょっと物足りないような気もしました。もし今後、ドラマ化などが具体的に検討されることとなった場合、これが目玉事業にもなり得る事業でございますので、武四郎の功績を礼賛することも大事なことでございますが、当時の北海道の状況ですとか、アイヌの方々の生活、どのような苦勞をされたのかというようなことを伝えることが望ましいのではないかという意見でございます。

もう1つ、今、高校生の方からの意見を聞いて本当に感動いたしました。本当にしっかりしていると思いました。若い方の意見をもっと聞くような機会を持てればいいなというふうに思った次第でございます。以上でございます。

● 飛田委員（北海道農業協同組合中央会）

農業中央会の飛田でございます。私ども第一次産業、私は農業者ですから、農業の関係でございしますが、150年があるからということではなくて、農業は常に前向きに経営をしっかりと進めていく、これが一番大事なセクションでございまして、同時に150年を契機に私どもそれを大きな起爆剤として、どのように取り組んでいくかということが一番大事なところでございます。

そんな中でさきほど、中川さん、坪井さん、山岸さん、私も大変感動いたしました。特に農業者ですから、坪井さんのお話をお聞きをして今の若い人はこんなに素晴らしい考えを持っておられるのだと。私も高校を卒業して農業をやっておりますけれども、高校時代にこんな考えを持ったことがあるのかどうか。なんか自分が恥ずかしくなるような、そんな感じがいたしましたけれども、いずれにしても、こういう人たちが農業をやっていきたいんだという思いをどのように私どもがしっかり受け止めるのかということです。やはり、特に、北海道の場合、110万haを耕作して、そこから生産を高め、そして安心・安全、については北海道で付加価値を高めて、農業の存在価値をしっかりと日本中に示していくと。食料というのは農業の基本ですから。食料がなければ人間は生きてはいけません。この自負をどのように農業という、あるいは漁業という仕事の中で生かしていくかということが一番基本であって、そのことをしっかりと大事にしていけばこそ、坪井さんのような若い方々が農業に就いていただいて良かったなという思いがあるわけで、そんなところを私どもしっかりと取り組んでいこうと考えております。

今ですね、GPSを利用して、トラクターに人が乗らないで動いて、作業するという非常に進歩した技術が発達をしております。私はまだ見たことがございませんが、いずれにしてもこういう技術をどんどん活用しながら。駄物をつくるわけではありません。トラクターに乗らないからだまって見ておればいいんだと、こんな考えを持っている人は百姓を辞めた方がいいです。この技術を活用して、農業を、安心・安全な農産物と畜産物をどのようにつくりあげて、国民のみなさんに供給するか、その基本をしっかりと身につけるということがやはり農業の基本だと思っております。

いずれにしても、農業は常に前進あるのみでございまして、私どもは毎日毎日、畑において、あるいは水田において、あるいは牛舎にいて、そのことが基本的な捉え方として、農協もあるいは連合会

も一番大事な組合員を守っていくために、どのように組合員とコンセンサスを持ちながら進んでいくか、これが基本でありますので、150年を通してそれがまた大きな起爆剤となっていくことを私は望むところでございます。

● **三好委員（株）北海道新聞社**

北海道新聞の三好でございます。

ちょっと事務局の方に伺いたいのですが、インターネットでのアンケート調査というのは、道庁のホームページから（見ることができるのか）。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

そうです。

● **三好委員（株）北海道新聞社**

そうですか。そうすると、92 件のうち「知っている」が 39%。「知らない」が 38%。少なくとも 38% の人はこれで知ったという訳ですね。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

はい。

● **三好委員（株）北海道新聞社**

鈴木さんがおっしゃってましたけれども、やはり PR なのですね、ポイントは。

いくら良い事業をやっても、多くの道民が参加してとか言ってもですね、今のところ、150 年ということをご存じの道民は明らかに少数だと。どういう方法があるか分かりませんが、やはりこういう検討会議、それからもうひとつ、今度ご意見を募集するわけですね。これなんかも、どういう事業をやるかとか、多分出てくると思うけれども、どう周知するか、どう参加していくかということなどは、我々が知恵を絞るとともに、やはり道民の英知といいますか、いろんな方々のアイディアをより一層当てにしなければならないのかと。これはなかなか言うほど簡単なことではないと思います。

それから、この原案については事務局の方が考えたり、整理されたものと思いますが、よくできていると思います。これすべてができるかどうかは分かりませんが。

私、個人的に言いますと、ぜひやらなければならないのは北海道史だと思います。資料を読みますと、昭和 45 年までを対象に昭和 56 年にできたとあります。相当長い期間ですね。これはあんまり開いちゃうと、本当は定期的に作るのが、増補の形でも、望ましいのだと思います。これが北海道の基本的な史料になる。これは 45 年からこちらの方を書くのではなくて、やはり 150 年以前からの通史を概観してつないでいくということだと思います。従ってこの時代は、見方がこうだったというものを、ある意味修正していくのが必要だと思う。これは地味なようですけれども一番エネルギーのいる事業だと思いますが、是非やってほしい。

もうひとつ、ちょっと気になるのですが、これは明治 2 年から数えて 150 年ですね。国はですね、満 150 年、明治維新 150 年があるわけですね。政府は明治 100 年のときに大々的な事業をやった。まだあまり出てきていないけれど、おそらく明治 150 年というのを政府はやるのではないのでしょうか。それと関係はないといえば関係ないのですが、関係あるといえばある。この辺をどのように我々

ンクさせるのかどうなのかということにはちょっと勉強しておかなければいけないと最近思っています。

事務局の方には悪いですが、その辺の整理等々お調べいただければと思ひまして、まとまりのない意見ですが、以上でございます。

● 高橋賢友委員（北海道経済連合会）

北海道経済連合会の高橋でございます。初回の参加となります。よろしくお願ひいたします。

基本方針原案については、大変よくまとまっていると感じております。特にこれに関して具体的な注文というものはございません。最優秀賞受賞者の作文、非常にみなさん前向きな若い方の意見に感銘を受けました。

そういった意味で、経済界としても、若い人が夢を持って活躍できる社会に向けて、なんとか北海道産業の将来像みたいなものを示すきっかけにして、この事業についても前向きに取り組んでいければなと思ひております。

本当に、農業にしても、これからの農業はICTを活用した農業が大事になっていきますし、高齢化の中で若い人が農業に参加できるような、そういったことを北海道が発信していくというのが大事なのかなと思ひますので、そういったものを含めて北海道の経済・産業の将来像みたいなものを語るきっかけにしていければと思ひました。

それからひとつ、30年の事業ということで、あと1、2年半ほど間が空くわけですが、それをいかに盛り上げていくか、これが大事なのかなと思ひています。ですから、経済界としても、例えば29年度の北海道経済連合会の事業の中にも、北海道150年事業を盛り上げるような事業を、前の年ではありませんけれども、イベントなりそういったものを盛り込んで、経済界として機運を盛り上げるように取り組んでいければと感じました。私からは以上です。

● 高向委員（(一社)北海道商工会議所連合会）

個人的な考えなのですが、アイヌの人々に対する配慮という面では、アイヌ文化の尊重という議論がこれまで随分あります。私は、それと同時に、アイヌ民族の方々への支援というものも大事ではないかと思ひます。

具体的には、すでに福祉的な面での配慮がおそらくあるのだろうと思ひますけれども、例えば、北海道の国公立大学には、アイヌ民族のために一定の入学の枠を設けるという配慮。あるいは、どこそこの川はアイヌ民族の人だけが魚を捕ってよろしいとか、どここの山では、アイヌ民族の方が動物を撃つてよろしいとか、こういう支援をする方法がないかなと夢見ているわけでありまして。全く基礎知識がありませんから、とんでもないことを言っているのかもしれませんが、あるいは馬鹿げたことを言っているのかもしれませんが、感想としてそういうことを思ひております。

● 山口委員長（北海道大学）

それでは私の方からも一言申し述べさせていただきます。歴史という観点で、やはり私は、北海道は150年で短いというそれ以前に、いまこの島の歴史としては、延々として長い歴史がある。そういう意味で私は、4ページ目の北海道みらい事業の中で、「アイヌ文化の発信」というところですが、私はぜひ北海道の若い人に対しての発信事業であってほしいと思ひます。

というのは今回、教育委員会の関係の方がいらっしやっておりますけれども、私は小学生、中学生に向けて、やはり、島の文化としてのアイヌ文化をきちんと理解してもらふ必要があるのではないかと

思います。と申しますのも、私どもの大学で、留学生相手に、私どもの婦人会が始めたアイヌワークショップをやりますと、本当に留学生がこぞって参加します。喜んで「日本にもこんな文化があったのか」という形で、去年も、アイヌの方々に来ていただいて、アイヌ織を見たりとか本当に感動しておりました。そういうものを普及させるのは、国際感覚を養うために極めて大事だと思いますね。

私どもの大学ではアイヌ・先住民研究センターというのがありまして、そこでの協働といいますか、先ほどニュージーランドのマオリのお話もありましたけれども、オーストラリアのアボリジニ、あるいはフィンランドにはサーミという先住民がいます。それぞれの大学、フィンランドでいいますとラップランド大学では、そのことによって北海道大学と組んで研究がしたいという申し出も毎年のようにあります。それがきっかけでそういう研究も始まっています。

世界的に先住民に対する意識は、国連での宣言以来変わってきている。そういう意味では、そういうイメージをこの島で持ち得ていることが、北海道にとっての財産であります。その意味で、特に若い人たちがそれに気づくということ。割と海峡を越えていくことに尻込みすると言いますか、心の中で自信がない、深さのところでは歴史がないと北海道と言われるケースがあると思いますが、これが基本的にアイヌ文化というものを理解することによって、姿勢が変わっていく可能性もある。

そういう意味で、北海道みらい事業の中でアイヌ文化の発信というのは内向けに、外向けではなくて内向けにやっていただきたいなど。これには教育委員会が関わってもらいたいと。私のひとつの考えでございます。

以上で一回りご意見をいただきましたので、知事からお願いします。

● 高橋はるみ委員（北海道）

時間も押して参りました。事務局の一角として、本当に多くのご指摘、心から感謝申し上げます。

2点だけコメントさせていただきます。

基本姿勢の中で、「世界の中の北海道」の視点が重要だというご指摘がございました。工夫をして、しっかり盛り込ませていただきます。それから、加藤理事長からございました、ポー川遺跡、標津、行きます。今度、確実に行きます。根室の市内にございますチャシ遺跡群、これは行きました。もう一步、標津まで足を伸ばします。ありがとうございます。

それから、広報のやり方、メディアとの協働、周知のやり方、このことについてもご意見がございました。プロの皆様方、道新さんとのジョイント企画も重要だと思いますし、鈴木社長のところのタレントの皆様方との連携も重要だと思います。それからネットのプロでございます伊藤社長もおられます。皆様方のご意見をいただきながら、しっかりした周知をやっていきたいと思いました。

それ以外にも多々ございますが、私からこういうことで。

それから、私は文句なしにアイヌ文化が「好き」でございます。そのアイヌの人たちの自然観というのが、まさに21世紀型の環境の世紀に合うと、私はいろんな場で申し上げているところでございまして、このことをもっと、いろんな方々に知っていただくことは何より重要だと思いますし、今、2020年のオリンピック・パラリンピック、東京オリンピック・パラリンピックのオープニングセレモニー等の場で、アイヌ文化というものを、日本を代表する文化の一つとして、しっかり発信していこうということを、政府に対して反復継続的に行っているところでございますので、今日のこのメンバーの皆様のご理解・ご協力を心からお願い申し上げます。ありがとうございます。

● **山口委員長（北海道大学）**

1点、私の方で忘れておりました。

基本方針の原案につきまして、本日の議論を踏まえたいろいろなご意見を反映することについてを事務局に一任し、道民からの意見募集を開始してもよろしいでしょうか。

● **各委員**

異議なし。

● **山口委員長（北海道大学）**

どうもありがとうございました。では、事務局で意見募集の作業を進めていただきたいと思います。それでは、最後に全体を通して特にご発言、何かございますでしょうか。

● **加藤委員（(公社)北海道アイヌ協会）**

北海道 150 年だから、JR、何とかいい方法ないですかね。150 年前に戻しちゃ困るんだよ。いろいろなもの、北海道にいいものがあると言っても行けなくなる。何か方法はないのだろうかと思います。工夫してもらいたいと思っています。赤字だから切る、これは小学 1 年生でもやることだから。以上。

● **山口委員長（北海道大学）**

はい、ありがとうございました。他にありますか。よろしいでしょうか。

それでは本日の議事は全て終了いたしました。議事進行へのご協力に感謝いたします。それでは、事務局にお返しします。

● **平野政策局長（事務局：北海道）**

山口委員長、議事の進行どうもありがとうございました。

今日ご参加の委員の方々からも、大変貴重なご意見をいただきまして誠に感謝申し上げます。

先ほど、知事からもお話がありましたが、本日のご議論を踏まえまして、基本的な考え方に、世界、グローバルといった点の表現方法などを工夫した上で基本方針に対します道民からの意見募集、これも、広くPRをしながら募集をしてまいりたいと思いますので、できるだけ早く実施をさせていただきたいと思っております。

また、今日のご意見や道民からのご意見などを踏まえして、次回の検討会議までに、基本方針（案）を整理していくこととしております。委員の皆様には、検討の経過などについて、適宜ご報告、ご相談をさせていただくので、どうぞよろしく願いいたします。

また、次回の道民検討会議は 10 月 19 日（月）を予定しておりますので、日程の調整につきまして、よろしく願いしたいと思います。

なお、最後に、みらい日誌の最優秀賞を受賞された方、代理の先生、引率の先生、山口委員長、高橋知事、飛田委員、小磯委員と、記念撮影をさせていただきますので、お残り頂きたくお願いをいたします。

それでは、本日、長時間に渡りありがとうございました。

（以上）